あなたはあなたのままで

山形県立天童高等学校　二年　京郷　結衣

私は飲食店でアルバイトをしている。ある日、左片に麻痺のあるお客様が車いすで来店された。私は、その方が車いすで移動しやすいように席まで案内した。その時、「困っていることがあったらできるだけ手伝おう」という気持ちで対応していた。しかし、その方との関わりを通して、障がいのある人に対する自分の考え方が変化していった。

そのお客様は料理を注文する時に、「このステーキは細かく切ってほしい」「フォークなどはここに置いてもらえますか」など、自分が食事しやすい方法を具体的に申し出してくださった。飲み物がなくなったときにも、「自分では取れないのですが、どうすればいいですか」と確認してくださることもあった。

私はその方の姿にはっとした。障がいのある人は、困っていることが多いから、自分ができるだけ手伝わなければいけないと思っていた。しかし、その方は「できないこと」を周りに任せるのではなく、自分ができることは自分で行い、難しいことについては、自分でできるのかを考えたり、必要な助けを自分から伝えたりしていた。私は「障がいがあるから何でも手伝う」のではなく「その人が自分でできることを大切にしながら、必要なところを支えること」が大切であることに気づくことができた。

私は店員として、その方ができるだけ自分で食事を楽しめるように工夫した。例えば、飲みものがなくなったときには自分で店員を呼べるように、近くに呼び出しボタンを置き、「なくなったときはこちらを押して下さい。」と伝えた。また、ステーキを細かく切ってほしいという希望を厨房に伝えたり、ライスの量を確認したり、料理について分かりやすく説明したりした。

少しの工夫でその方が自分でできることが増え、食事を楽しむことにつながるのだと感じ

た。そして、「障がいがあるからできない」と決めつけるのではなく、「どうすればできるようになるのだろう」と考えることが大切なのだと学んだ。

この経験を通して、「障がいがある人と障がいがない人」という分け方をしすぎないことも大切なのではないかと思った。障がいによって生活の中で困ることや支援が必要なことはある。しかし、その人のすべてを周りがしてしまう必要はない。その人にはその人の考えや気持ちがあり、自分で決めたいこと、自分でやりたいことがある。障がいがあるという一つの部分だけで、その人全体を決めつけてはいけないと思う。

「障がいがあるからかわいそう」「障がいがあるから助けてあげなければならない」と考えることは、本当の意味で相手を尊重することにはならないのではないだろうか。もちろん、困っているときに手を差し伸べることは大切である。しかし、それと同じぐらい、「あなたができることはあなた自身でしていい」「困ったときには遠慮せず助けを求めていい」と思える環境をつくることも大切だと思う。

私は、障がいの有無にかかわらず、一人一人が自分らしく生活できる社会になってほしいと思っている。そのためには、特別な人だけが頑張るのではなく、私たち一人ひとりが相手の立場を考えて行動することが必要だと思う。例えば、困っている人がいたら声をかけること、相手が自分でできることを尊重すること、そして必要なときには協力することなど、身近なところからできることはたくさんある。

今回の経験で、私は「助ける」ということの意味について考えるようになった。相手のために何でもしてあげることが優しさなのではなく、その人が自分らしく過ごせるように必要なときに支えることも優しさなのだと思う。そして、障がいがあることを理由に、その人が「自分は周りと違うから」という負い目を感じるのではなく、「自分は自分でいい」と思えるような環境を私たちがつくっていくことが大切なのだと思う。

私にとってこのお客様との出会いをこれからも忘れないようにしたい。障がいがある人もな

い人も、お互いの違いを認め合い、できることを尊重し、困ったときは支え合う。そんな社会をつくるために、まずは私自身が相手を「障がいのある人」として見るだけではなく、ひとりの人として向き合うことを大切にしたい。そして、相手の「自分でやりたい」という気持ちを尊重しながら、必要なときには自然に手を差し伸べられる人になりたい。